

臨床・障害 8 (965~973)

座長 船津守久・一門恵子

- 965 自閉症児の言語行動に関する事例研究
東北大学 松木健一
- 966 自閉的傾向児の養護・訓練領域における行動特徴について(Ⅱ)
国立特殊教育総合研究所 寺山千代子
- 967 自閉児の学校適応について
熊本大学 一門恵子
- 968 幼児の対人関係障害
——対人関係行動チェックリストによる——
東大阪市保育研究室 広利吉治
- 969 自閉児のコミュニティ・ケア
——愛知県下における療育グループ・障害児保育の実態調査を通して——
名古屋大学 譲西賢
- 970 自閉児の行動形成に関する研究(Ⅰ)
——外来治療における治療態勢の確立への試み——
福岡教育大学 船津守久
- 971 自閉傾向児の言語性能力と動作性能力の比較検討
——K式発達検査を用いて——
大阪府立中宮病院松心園 岡田正幸
- 972 自閉症児のコミュニケーションの悪さについて(Ⅱ)
——WISCのプロフィールとPFTへの反応——
早稲田大学 井原成男
- 973 同一性保持傾向の強い子供の認知の特性およびその発達の考察
——K式発達検査を用いて——
大阪府立中宮病院松心園 小寺鉄也

松木(965)に対して、大井(愛媛大)より、①文字による欲求の表現が増えたかどうか、②もし増加したとしたら、それはコミュニケーション手段のモダリティによるものか、③自閉児の場合、文字や絵カードによる「交流」は、それ自体完結した行動として長く続き、生活場面に般化しにくい、本事例の文字による「交流」の導入は、コミュニケーションの能力の発達上いかなる意味があるのか、の3点について質問があった。松木は、①文字による発信行動は、訓練開始時に比べいくらかは増えたが期待したほどではない、②文字信号系は、欲求をすぐ表現できるといった即効性に欠ける面がある、③文字による「交流」は、本児の低い言語状態を高める目的にとっては有効であったと思うと回答した。

山松(追手門学院大)は、一門他の凡ての発表者に対して、多くの発達が自閉児を社会的適応の側面から捉えたものであったが、個人的要求の充足も教育活動として重要であり、普通児と同等の適応の基準を自閉児に求めるのは、非生産的で時には苦痛さえ強いることになりかねないと指摘した。

寺山(966)は、山松に対して、直接的回答にはならないが、養護・訓練の「心身の適応」の領域において自閉群と非自閉群の間に顕著な差がみられ、自閉群はこの領域における訓練・指導が必要であろうと回答した。続く、坂上(作陽短大)からの、「音の弁別」の項目の判定方法・基準についての質問には、担任の評定によったと答えた。また、氏森(東学大)は、CAとの関連について質問したが、寺山は、CAよりもIQとの関係が強いと思われたのでCA要因については検討しなかったと回答した。

一門(967)は、上記の山松の指摘に対して、今回は学校教育の側面から自閉児の問題の一面を捉えたに過ぎず、個人的要求の充足の面からも十分な教育的配慮が必要であろうと述べた。

譲ら(969)に対して、布尾(高岡養護)より、名古屋市の障害児保育に対するスーパーバイザー方式についての具体的説明が求められ、丸井・蔭山(名大)は、児童福祉審議会の答申によって実現したもので、54年度から公立保育園では混合保育が原則となり、約70名の障害児に対して4名のスーパーバイザーがそれぞれの保育園を年2回訪問して指導していると説明した。

船津(970)に対して、青山(安田生命子ども相談室)より、治療期間とその間のRewardの変更について質問があり、船津は、治療期間は2年間で、Rewardは変えていないと答えた。また、青山は、食事のコントロールもうまくいっている、CMやレコードの代りに食物をRewardとして使用できる段階にきていると思う、さらに、今後親を治療者として育てていくことによって外来での指導態勢を強化できると思うとの意見を述べた。

岡田ら(1971)に対して、山松より、自発語をもつ群、エコラリア中心の群、表出言語のない群の3群について検討して欲しかったとの希望が出されたが、岡田は、エコラリア中心群のサンプルが十分集められなかったと回答した。

井原(972)は、氏森からのPFTの使用目的の確認に対して、自閉児のコミュニケーションの特徴把握のために使ったと答えた。(船津守久・一門恵子)